

「高市首相」の苦難の船出にエールを！

「日本が変わりそうな予感」

26年間にわたり自民党と連立を組んできた公明党が離脱し、21日の臨時国会での首相指名選挙は、少なくとも決選投票では比較第一党の自民党の高市氏が初の女性総理に選出される見込みです。

「離脱ありき」で突き進んだ公明に振りまわされたものの、高市氏は維新や国民民主からの可能な限りの「協力」を取り付ける努力を続けています。

公明の離脱は「会談」の4日前に決まっていた？

公明党の斉藤代表は、「企業・団体献金」の規制強化などでの同党の要求に高市総裁が応じなかったことを連立離脱の理由にしています。

しかし、「プレジデントオンライン」で、元読売新聞論説主幹で同社客員研究員の小田尚氏は「連立離脱は創価学会の原田稔会長の主導だった」

す。歪んだメディアや老害評論家による「高市下げ」など打ち破り、内外の課題に果敢に挑んでもらわなければなりません。Jリーグの初代チェアマンだった川淵三郎氏はSNSで「男性より女性の方が思い切った決断をする人が多い。何か日本が変わりそうな予感がする。将来に希望が持てる日本を取り戻してくれ」と熱いエールを送っています。

と断言。「10月6日夜、斉藤代表、西田実仁幹事長と学会本部で会い、連立離脱すべしという強硬方針が決まった。離脱の理屈や方法は斉藤氏らに委ねられた」と暴露しています。

驚くことに公明の連立離脱に関しては、次のようなさらに憂慮すべき動きもありました。

公明内の離脱決定日に
中国大使が斉藤代表と面談

斉藤代表が高市総裁誕生の2日後の6日に中国大使と面会していたのです。6日夜に内部で離脱を決定していたという前述の記事が事実なら、その直前に呉氏が斉藤代表を訪れたのは余りにも不自然です。

10月11日、YouTube番組で、斉藤代表は当日、議員会館の自室で中国の呉江浩大使と面談したことを認め、面談は1〜2週間前から決まっていたとしています。しかし、高市氏に対する呉大使の「評価」を訊かれると、「いや、それは、あの、ちょっとそういう会話の内容については、外交問題でもありませんし、ちよつと控えさせてもらいたい」と言いよどんでいたといえます。

大使が斉藤代表に「靖国」などで圧力を掛けたであろうことが容易に想像できます。

呉大使は、昨年5月、台湾有事に絡んで「中国分裂を企てる戦車に縛られてしまえば、日本の民衆が火の中に連れ込まれることになる」と言い放った人物です。

維新共同代表「日本の政党が
ごちゃごちゃ騒ぐのよくない」

斉藤代表が連立の条件に「靖国問題」を持ち出したことについて、維新の藤田共同代表は8日の記者会見でこう批判しました。「先人たちに手を合わすという尊い行為を、何か政治的に取り扱われたいようにするのが私たちの知恵の絞り方かなと思う。日本の政党がそういうことをごちゃご

80年所感はいづれに
出づりだったのか

石破首相が10月10日、「戦後80年によせて」と題する「所感」を発表しました。閣議決定を経ていない「個人的見解」でありながら、これを官邸のHPに載せ、記者会見までしました。しかし、「戦争をなぜ止められなかったか」について、国内事情だけで語れるはずがありません。自虐史観からは一歩も出ていません。

安倍元首相は過去の歴史を教訓にして現実の国際情勢に対処する「積極的平和主義」を唱え、これを実際の外交に活かしました。しかし、石破氏にはそんな実績などまったくありません。著

ちやと騒ぎ立てるってうのは、それ自体良くない」。自民党議員の多くが、公明の「離脱」を恐れて黙ったままだったことを考えれば、痛快でした。

いづれにしても、公明が騒ぎ立てたことで、「高市首相」の早期の靖国参拝は難しくなりました。しかし、焦ることはありません。案外首相がそのうだったように、じっくり力を蓄えてから、然るべき時に参拝すればいいのです。

作物や歴史学者から学んだ内容を文字にしただけで、わざわざ、退陣を前に発出する意味などなかったと言えるでしょう。

石破首相はかつてこう言いました。「『必要最小限度だから戦力ではない』という考え方はかえって国民の理解を妨げる。国内においては違いますが、国外においては軍隊だ。そのような議論は国際的に通用するものではない」。そこまで書き込めば、まだ、「所感」の現実的意味があったのかもしれない。

所感がただの「思い出づくり」だったとすれば、悲しいことです。